

長崎県海域におけるスルメイカ漁況について

長崎県総合水産試験場

漁業資源部 海洋資源科

はじめに

スルメイカは、長崎県海域では、主に冬に漁獲され、この時期の重要魚種のひとつとなっています。

スルメイカには、産卵期がちがっている「秋生まれ群」、「冬生まれ群」および「春夏生まれ群」の3つの系群があり、それらが季節的に本県海域に回遊してきたものを、漁獲対象としています。

スルメイカの分布・回遊

「秋生まれ群」は、北陸沿岸から東シナ海北部を主産卵場とし、9～11月に生まれ、春から夏に成長しながら日本海の沖合を中心に北上します。その後日本海を南下し、秋期に本県海域へ回遊してきます。

「冬生まれ群」は、東シナ海を主産卵場とし、12～2月に生まれ、春から夏に太平洋あるいは日本海を北上し、本州から北海道およびカラフト西部の沿岸域に広く分布します。秋から冬期に日本海を南下し、冬期に本県海域へ回遊してきます。

「春夏生まれ群」は、本州～九州にかけた日本海沿岸を主産卵場とし、4～8月に生まれ、前の2群に比べ回遊範囲が非常に狭く、地域性が強い群です。本県海域へは、春期から夏期に回遊してきます。

これら3群のうち、資源量が多く、漁業資源として重要な「冬生まれ群」と「秋生まれ群」については、全国規模で資源評価が行われており、現在の資源状態は、秋生まれ群については「資源水準は中位で、減少傾向」、冬生まれ群については「資源水準は中位で、横

ばい傾向」とされています。

長崎県海域における漁況

本県の主要生産地である対馬、壱岐海区のイカ釣漁業を例に月別漁獲量の推移をみると、冬生まれ群が来遊する12～2月に漁獲が多くなっています(図1)。

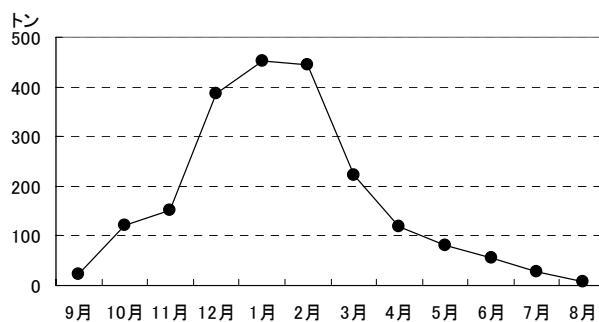


図1 対馬と壱岐の代表漁協を合計したスルメイカ月別漁獲量の推移(最近5年平均)
(当年の9月から翌年の8月まで)

便宜的に、9～11月の漁獲物を「秋生まれ群」、12～2月の漁獲物を「冬生まれ群」、4～8月の漁獲物を「春夏生まれ群」として、最近5カ年の平均をみると、冬生まれ群が全漁獲量の69%に対し、秋生まれ群は全体の16%、春夏生まれ群は15%となっており、本県海域では冬生まれ群が重要な地位を占めています。(図2)

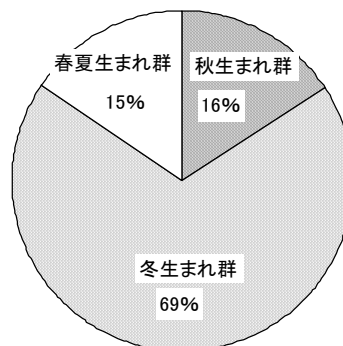


図2 対馬と壱岐の代表漁協を合計したスルメイカ系群別漁獲割合(最近5年平均)

冬生まれ群について昭和60年以降の経年変動をみると、平成12年に1,810トンの最高値を示した後はやや減少傾向となり、平成17年には619トンまで減少しましたが、平成18年には1,200トンまで回復しました。(図3)

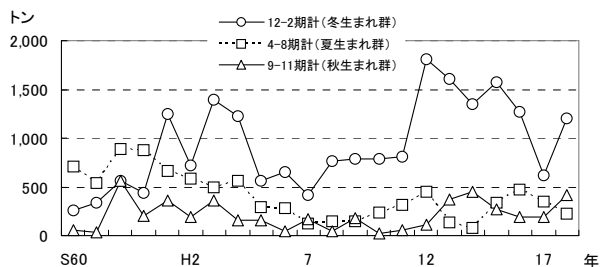


図3 対馬と壱岐の代表漁協を合計したスルメイカ漁期別漁獲量の推移
(注)12-2期計は当年12月から翌年2月までの合計

最後に

本県海域では、冬期のスルメイカが重要な漁獲対象となっていることから、当水産試験場では、対馬、壱岐海区における冬期（12月～2月）のスルメイカについての漁況予測を平成11年から行っており、今年も11月末までには、漁況予報を発表する予定です。

(担当 山本憲一)